
僕らの日々

池森利樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らの日々

【著者名】

Z5082B

【作者名】

池森利樹

【あらすじ】

ある日の昼休み。学校の屋上でなんともない会話をする少年と少女。たまには、『平凡な日常』の幸せを噛み締めてみるのも、いいかもしません。

「退屈ねえ、何か面白い事知らない？」

黒髪の少女は、灰色の地面に大の字に寝転がりながら不機嫌そうに口を開いた。

「知つてたら、こんな寂れた屋上で美紀なんかと一緒に貴重な昼休みを燻ぶつてる訳ないだろ」

緑のフェンスに寄りかかって座っている少年が、皮肉をたっぷりと籠めた声で言ひ。

美紀、と呼ばれた少女は一瞬少年を、キツ、と睨み付け勢いよく起き上がる。美紀はわざとらしく大きな足音を立てながら少年の横にくると、彼とは対照的に、外を見渡すようにフェンスに手を掛けた。

「どうして学生ってこんなに暇なのかしり……」

そう言ひて、まるで悲劇のお姫様のよつに憂いを帯びた表情でため息をつく。

「暇だ、暇だ、って言つけどなあ、健全な学生は勉強したり、部活やつたり、別に健全じゃなくてもバイトしたり、飲み会やつたりで普通に過ごしてれば退屈なんて言葉は出ないはずだぞ。……まあ、それが楽しいかどうかは知らんが」

少年は、美紀のほうを見ずに淡々と言ひ。

「何よ、健司だつて暇だからこんな寂れた所で私と煙ふつてゐるんでしょ？」

「ん~、それはもうなんだがな」

少年、健司は、もともと本氣で言つた台詞でもなかつたよつて、美紀の反論にあつたりと同意すると、そこで会話は終わつてしまつた。

「……そういえば、こんな話知つてるか？」

健司の声がじばりくの静寂を破る。

「どんな話？」

美紀が氣の無い声で尋ねる。健司は、ふむ、と言つてゆくつと空を見上げ、畳を閉じた。

「……むかーし、昔、一人の少年がいました

健司は、まるで紙芝居屋のおじさんのように語りだす。

「その少年には年が四つ離れた小学生の妹がいて、一人はとても仲良しでした」

美紀は、話を聞いているのかいないのか、外をぼんやりと見たままでぴくりともしない。

健司はそんな美紀を横目に見ると、ゆづくつと話を続けた。

「……しかし、ある日のこと、少年の妹は、信号を無視したトラックに轢かれて、……死んでしまったのです」

僅かな躊躇いの後、健司がそう言つと、美紀は、一瞬驚いたように目が見開いたようにも見えたが、それでもやはり微動だにしなかつた。

「少年は、とても悔やみました。自分を責めました。何故あの朝、妹と一緒に居なかつたのだろう？ 何故すぐわざで守つてやれなかつたのだろう？ そんな取り止めのない事を、延々と考えていました。そして、ずっと何もする気が起きないまま、少年は中学校を卒業して、親の言つままに家に近い適当な高校に入りました」

健司は段々と抑揚のない声になりながら、話を続けた。と、今まで何の反応も示さなかつた美紀が、顔を、ぐるり、と健司の方へ向け、

「それで、どうなつたの？」

と、真剣とも無表情とも言えない顔つきで質問した。

美紀のほうを見ずくに健司は話を続ける。

「すると、入学してからしばらくして、見知らぬ少女が話しかけてきたのです。そして、自分と友達にならいか？ と言つてきました。少年は『なーんだこの妙な女はあー？』と思いました」

健司がちらりと美紀の方に視線を向ける。美紀は、少しうつとした表情で健司を睨み付けた。

「何か？」

そう言つて健司は、にやり、と笑う。

「……別にいい？ それで？」

不服そうに美紀は続きを促した。

「少年は、最初はうつとおしいと思つていました。しかし、その少女は少年がどれだけ無視をしても、何度も何度も話しかけてきます。そして、気が付いたら一緒に昼ご飯を食べたりするようになり、どうでもいい話とか、つまらない愚痴とかも言い合つようになります。すると、不思議と妹が死んでから無くなつてた『感覚』が戻つてきて、少年はまた笑つたり、怒つたりする事が出来るようになります。そしてある日少年は思つたのです。こんな退屈な日常も悪くないのかな、……と」

僅かな沈黙の後、どうやら話が終わつたらしいのを理解して、美紀はあきれた様な顔をする。

「ねえ、それさ、何が言いたいの？」

健司はしばらへ考へ込むと、

「うーん、『暇もいいもんだよ』って昔話？』

と首をかしげながら言つた。

「いや、全然昔話じゃなかつたから。て言つか、健司はストーリー

「テラーニは向いてないわね。ビト手だもの」

「ま、基本引きこもりだからな」

「……ああ、確かに」

「いや、納得すんな」

「何よ、自分で言つたんじゃない。あつ……それとー」

美香は健司を、ビシッ、と指差して言つた。

「私は妙な女じやありません」

健司は一瞬止まつた様に見えたが、すぐここやつと笑い、

「やうか？ 十分妙だと思ひや」

と、茶化すよつて言つた。

「な、何て事を言つのよー」このピチチ美少女（一ノ元）に向かつて！

美紀はそつとつて、健司の泣き所に渾身の前蹴りを食らわせる。

「痛つてえー！ 何だよ、その変なキャッチフレーズみたいなのは！？」

健司は、蹴られた所を押さえながら、ぴょんぴょんと飛び跳ねている。

「『変な』とは何よー。『変な』とはあー。」

美紀は、先程と同じように発言を決める。

「ああ、ーー！」

健司は断末魔の声を上げ、その場にしづくまつた。

しばらぐすると、まだ少し涙田の健司が、美紀に顔を向けた。

「……やつこやあ、俺明日学校休むわ」

美紀は、そもそも当然と言わんばかりの表情で、

「うん、知ってる」

といひなずく。

予想外の返事だったのか、健司は少しばかり驚きを顔に浮かべている。

そんな健司を尻目に美紀はいつもと笑いながら、何処から出したのか、一輪の花を手に持っている。

「ハイこれ、妹さん！」

そう言つて健司に差し出す。

健司はしばらぐ呆然と、微笑む美紀を見つめていたが、やがて、

そよ風に揺れる真っ白な花を受け取ると、

「…………わざわざ」

と微笑み返した。

「なあ、お前わ…………」

何か言おうとした健司だったが、昼休みの終了を告げるチャイムがそれを遮った。

「あー、次の授業なんだつたつけ?」

美紀は、ずっと寝そべったままだった健司に手を差し伸べながら聞く。

「んつと、確か現国」

健司は、差し出された手を掴み、立ち上がりながら答える。

「えー、って事は野沢あ? 勘弁してよあの催眠術師

「お前は基本的に全部の授業寝てるんだから関係ないだろ…………」

健司があきれた顔で美紀を見る。

「むーー、言ひててくれるじゃないの」

美紀は顔を膨らませる。

「せ、せ、でもここにナビ授業に遅刻すんだ」

健司はやうに言つて美紀の頭をポンと叩き、足早に歩くと校内への扉開けた。

「あ、ちよつと待つてよー。」

美紀は急いで健司のほうへ駆け出す。

「……待たない」

健司が意地の悪い笑みを浮かべ、一気に階段を駆け降り出す。

美紀は、言葉にならない叫びを上げると、追いかけるように階段を下りていった。

『平凡な日常も悪くない』

誰も居なくなつた屋上に、一羽の燕がやつてくる。

そこは、春の心地よい風が吹き、退屈な羽休めにはこれ以上無い場所のようと思われた。

(後書き)

ほんの少し、骨休めのような気分で書いてみた作品です。読了して下さった皆様が、僅かでも、何かほんわかとした幸せ、を感じてくださったのなら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5082b/>

僕らの日々

2010年10月9日04時37分発行